

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「現代日本文化における伝統と変容」平成元年度シンポジウム「情報と日本人」(特別研究メモ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久保, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005849

特別研究メモ

「現代日本文化における伝統と変容」

平成元年度シンポジウム「情報と日本人」

久保正敏

いささか旧聞に属するが、平成元年一月二〇日から二二日までの三日間にわたって行われた、特別研究「日本文化における伝統と変容」の第八回シンポジウム「情報と日本人」で報告した者の一人として、各報告と討論の内容を振り返って紹介する。

本シンポジウムの実行委員長である民博の野村雅一氏は、現在進行中の「情報化」現象によって、その技術的原理がそうであるのと同時に、人間の意識や社会関係についても「脱文脈化」が進行しているのではないかと、すなわち、「情報化」とは「脱文脈化」と読み換えられるのではないかと、という基調報告を行った。その主旨については、『月刊みんぱく』一九九〇年三月号で既に氏が述べておられるので、それを参照していただくこととし、

ここでは詳しく繰り返さない。

この基調報告に引き続いて、△情報の発信と咀嚼▽△人間の側の変化▽△情報の価値と情報産業▽の三部構成に分けて計一名による報告が行われた(文末参照)。本稿では、この枠組みに筆者なりの見解を加えて、それぞれの要旨を紹介する。

「脱文脈化」は、まず、さまざまな情報蓄積・通信メディア——印刷、有線系、無線系、さらに、ニューメディアと呼ばれる記録メディアやコンピュータと結びついたサービス——の技術原理である。発生した情報は、これらのメディアによって、可搬性、変形可能性、複製可能性などの特性を得て文脈から独立することが容易となったのである。

こうしたメディアの成立が人間意識の側にどのような変化をもたらしたのかを論じたのが、佐藤健二氏、吉見俊哉氏、飯沢耕太郎氏、および、嘉田由紀子・大西行雄氏の報告である。これら四つの報告が取り上げた、書物、電話、写真、パソコン通信の各メディアは、情報の表現媒体である文字、音声、画像、の脱文脈化メディアおよびニューメディアの代表的なものにそれぞれ対応している点に、報告者を選するにあたっての実行委員長のねらいが示されている。

メディアによる脱文脈化

佐藤氏は、印刷技術の進展によって近代読書が成立し、読者が「黙読」技術、すなわち、視覚と聴覚を分離する身体技法を身につけるとともに孤独・批判的な情報への接し方を覚えたことを論じた。また、「索引システム」という情報の構造化技法を知ったことも大きな意義があると指摘した。この報告を踏まえた討論の中では、現在では読者の自費出版という「生産即消費」という構造が成立している点にも議論が及んだ。

吉見氏は、電話の発明時からの利用の歴史を振り返りながら、電話によるコミュニケーションの変容を論じた。発明当初はニュースや音楽を放送する「有線ラジオ」として登場した電話が、やがて要件伝達の手段と考えられていた時期を経て、個人に一台まで普及した現在では、コードレス・テレホン、テレホン・カード、伝言ダイヤルなどの技術的サポートとあいまって、個人の遊びの手段へと変容していることを示し、メディアの大衆化、個人化につれてその機能がどのように変容するかを描き出した。さらに、家庭で電話が置かれる場所に注目し、玄関、応接間、個人の寝室へと侵入するにつれ、電話が個人を外部に直結し、家族共同体を分解する作用を果たしていること、それにともなって身体が電話回線に融溶し

てゆくという身体感覚の変容が起きていると指摘した。

飯沢氏は、写真の発明には、視覚中心文化の成立、イメージの私有化、機械の眼による身体感覚の拡張、の三つの意味があると指摘した。次いで、日本における写真の歴史を、幕末の肖像写真の時代、明治から大正にかけての上流階級のアマチュア写真家による芸術写真の時代、関東大震災以降、大衆化した写真家たちによる新興写真とフォトジャーナリズムの成立によって日本人が近代都市に対するイメージを自分の内部に形成することができるようになった時代、に分けて豊富な写真資料を示しながら振り返った。さらに、電話の個人化段階でも見られる「メディア・身体感覚融合」状況を最初に実現したのがカメラではないかと指摘した。

嘉田氏と大西氏は、シンポジウム会場に持ち込まれたパソコンを実際にネットワークに接続してリアルタイムの通信状況を示しながら、両氏が琵琶湖の環境を情報化するために始めた「湖鮎ネット」というパソコン・ネット運営の経験を報告した。パソコン・ネットがまだ若いメディアであるために、ネットに参加する人たちが限定されており、発信型メンバと受信型メンバに分かれてしまふ、などの興味ある問題点も紹介された。発信型メンバにとってパソコン・ネットは情報生産の手段に他なら

ないから、自費出版と同様の「生産即消費」構造がここでも成立する、と議論が進んだ。

このパソコン・ネットは、生活という文脈から切り離さない形での情報発信をねらって開設されたものだが、情報の受信・咀嚼過程で生活文脈はどのように捉えられるかを論じたのが、北村光二氏の報告であった。氏は、一九八三年に起きた日本海中部地震についての災害情報で地元漁村民にどのように受けとめられたかの調査結果を紹介しながら、公的ルート、マスコミ・ルート、パーソナル・ルート、それぞれによって入手した情報を、いったん生活という文脈の中に位置付け直してから人々が避難行動をとったことを明らかにした。この点は、役立つと思われる情報が与えられると人々がそれに機械的に反応する都市型災害の場合と対照的ではなかるうか、と氏は指摘した。

情報の発信側があえて脱文脈化を阻む例として関一敏氏が報告したのが、天理教における建築物というメディアである。百有余年にわたって築き上げられつつある建築物が宗教情報の伝達メディアとして機能している状況と、建築物の中心部分の複製を決して許さないという脱文脈化阻止の姿勢が報告され、各教団がどのような情報化戦略をとるのかといった興味深い問題が提起された。

情報に期待される価値

こうした多様なメディアによって作り出される情報の中味がどのように変容し、それとともに情報に対する人間の価値意識がどう変化してきたか、について焦点をあてた報告がシンポジウム後半で行われた。

井上 俊氏は、目的論的な効用に重点を置く実利情報に對して、その関連情報やカタログ情報などのいわばメタ情報が増殖してゆく現今の情報「多層化」状況を紹介し、一九七〇年代に入ってから若者意識が、「シラケ」から軽い「ノリ」へ、さらに「劇場社会」での演技者へと変化してきた状況と重ね合わせながら、メタ情報で「遊ぶ」若者の姿を描き出した。討論の中では、若者が情報で遊ぶ能力に優れているのは、メディアの操作能力や情報の解読能力（情報リテラシー）に優れているからではないか、そしてこのことが、若者文化論が現在数多く展開されている背景のひとつであろう、と議論が進んだ。

筆者は、データ、情報、知識、などの概念の相違、日本における情報という言葉の歴史、メディアという言葉の定義などを整理し、情報に求められる効用が、実用的価値から快・楽・おもしろい価値へ、知的効用から情緒的効用へと変化していることを述べ、またこれに関連付け

て、明治期以降の情報産業の歴史的展開を六期に分けて整理することを試みた。

端 信行氏は、遊びの対象となる情報が増大しつつある一方で実利情報が依然として日本的経営の核であり、その価値付けのメカニズムとして「数値化」と「番付化」がキーではないか、と指摘し、これを受けた討論の中で、これら二つのメカニズムの相違や、日本と欧米における相違が議論された。

最後に高田公理氏は、マクルーハンの用語を援用しながら、工業化社会における情報は機能性に重点が置かれた「メッセージ型情報」が価値を持つのに対し、ポスト工業化社会においては遊戯性に重点がおかれた「マッサー型情報」が価値を持ち、これは、工業化社会の時期に情報に対してシャノンやウィナーが下した定義とポスト工業化の時期にベイトソンが下した定義との相違にまさに対応すると指摘した。さらに、江戸期から現在まで情報に期待される価値の歴史を振り返って見れば、遊戯性から機能性へ、そして再び遊戯性へと回帰する「遊戯化曲線」が想定できるとし、これと梅棹館長がかつて示した「文明史曲線」とを掛け合わせれば、情報に関するパラダイムは遊戯性へと向かうスパイラル状の動きを示すのではないかと展望した。

さまざまな問題提起

これらの報告と討論を踏まえて、最後の総合討論セッションでは、二時間余にわたって白熱した議論が展開された。「脱文脈化」に関しては、技術原理としての脱文脈化がパーソナル・メディアの普及に寄与し、その結果、従来の家庭や共同体という文脈から個人を脱文脈化させ、新たな「遊戯化社会」という文脈を生成したのではないかと、そしてこの遊戯化というパラダイムは、目的志向の工業化社会の次の段階において生じるべくして生じたものではないかと議論が進んだ。このようなパラダイム転換論は、一九六二年の『情報産業論』や一九八八年の『情報の文明学』等で梅棹館長が既に主張してきた枠組みに沿ったものと言えよう。

メディア・身体感覚融合論に関しては、汎情報環境と身体との融合や、情報生態学といった視点での議論が今後必要になるであろう、という指摘がなされた。最近、情報処理の分野では、人工現実感 (Artificial Reality) の研究が進められ、ヘルメットをかぶりセンサ付き手袋をはめた被験者の頭や手の動きに応じた人工の映像をヘルメット内に映し出す装置の開発などが進められている。技術の側はいかにして現実をシミュレートした環境を提供できるかに関心があるのだが、本シンポジウムで議論

されたような、人間意識におけるリアリティの変容についての視点も必要になってくるであろう。また、情報と身体が融合する事態においては、何が現実であるかを判断する際に個人が自分自身の「文脈」を確立している必要があるのではないだろうか。

総合討論では、汎情報環境を肯定的にとらえる意見が多かった中で、いくつかの問題点も指摘された。ひとつは、情報の地域格差、いわば、情報の南北問題である。もうひとつは、情報の解読能力だけでなく発信能力の個人差の問題である。これらの能力を広い意味での情報リテラシーととらえるならば、その獲得に後れをとった人たちにとって汎情報環境は居心地が良いものであるだろうか。このように多面的な切り口で練り広げられたシンポジウムの議論は、従来は技術論、経営学、経済学、現代社会学等の文脈で個々に論じられることが多かった「情報化」を、「現代日本文化における伝統と変容」という文脈の中で位置付け直した点で意義が大きく、情報化の技術サイドに居る筆者にとっても非常に知的刺激に満ちたものであった。このシンポジウムの記録と報告された論文は、これまでと同様に、「現代日本文化における伝統と変容」シリーズの一環としてドメス出版から刊行される予定である。

なお、シンポジウムの日程および報告者とテーマは、次のようであった。

二月二〇日

挨拶 梅棹忠夫(民博)

問題提起・情報と日本人

野村雅一(民博)

「生活」というコンテキストと「情報」

——災害時における情報伝達と流言——

北村光二(弘前大学)

伝達媒体としての建築物

——天理教の「神殿」「おやさとかた」普請をめぐって——

——

関 一敏(筑波大学)

近代読書の誕生と変容をめぐって

佐藤健二(法政大学)

電縁遠野物語

——パソコン通信「湖鮎ネット」と環境情報——

嘉田由紀子・大西行雄(琵琶湖研究所)

二月二一日

電話コミュニケーションの変容

吉見俊哉(東京大学)

情報化と生活意識の変化

——情報の「多層化」と生活意識の「演劇化」——

井上 俊（大阪大学）

近代都市の成立と写真

飯沢耕太郎（写真評論家）

情報の価値と流通——そのモデル論的考察——

久保正敏（民博）

一月二十二日

経済と情報

端 信行（民博）

「情報産業論」の再考

高田公理（愛知学泉女子短期大学）

総括討論

そのほかの討論参加者は次のとおりである。

石毛直道（民博）、石森秀三（民博）、泉 幽香（民

博）、井上忠司（甲南大学）、栗田靖之（民博）、小山

修三（民博）、杉田繁治（民博）、祖父江孝男（放送大

学）、竹村卓二（民博）、中牧弘允（民博）、森田恒之

（民博）、守屋 毅（民博）、吉本 忍（民博）、米山俊

直（京都大学）

（共同研究員

京都大学大型計算機センター助教）

